

書道： 古くて新しい自己表現

毛筆と墨を使って字を書く書道は日本人にとって身近なものです。もともと、書道は中国が起源で、8世紀ごろ日本に入ってきたといわれています。その後、日本では独自の書道が発展すると同時に、一般の人びとのあいだにも根づきました。美しい字を書きたいと思う人は多く、習字や書道は習いごととして人気があります。

書道は、技術の向上だけでなく、美や自己のあり方を求めるものでもあります。この古くからある書道が、今また新しい表現方法として注目を集めています。

パフォーマンス書道：新しい表現

この数年、高校書道部のパフォーマンス書道という新しい動きが注目を集めています。書く過程をパフォーマンスとして見せることは、以前から書家が行っていましたが、最近注目を集めているパフォーマンス書道は、J-POPなどの音楽にあわせダンスの要素を取り入れながら、巨大な紙に歌詞などを集団で書くというものです。このときに使う筆は大きいものでは重さ10キロもあり、これを2～3本束ねて使うこともあります。重たい筆を持って大きな紙に大きな字を書くには相当の力が必要なことから、パフォーマンス書道を行う書道部のなかには、ランニング、腕立て伏せ、腹筋運動、背筋運動などをして体力強化に努めているところもあります。一人で半紙に向き合うふだんの書道とは違い、みんなで力をあわせてひとつの作品を作り上げていくところに、パフォーマンス書道の魅力があるようです。

10数年前にある高校が始めたのをマスコミが取り上げたことから評判になり、あちこちの高校が取り入れるようになりました。動きがあって迫力のあるパフォーマンス書道は、学園祭や町のイベントなどで披露されることも多く、観客も新しい書道の魅力を楽しんでいます。

パフォーマンス書道を競う

この数年、パフォーマンス書道の大会がいくつか開かれるようになりました。大会では、完成した作品だけでなく、書く過程も作品の一部としてとらえられ、書道の技術のほか、表現力やメッセージ性も評価の対象となります。

愛媛県四国中央市で開催されている全国高校書道パフォーマンス選手権大会、通称書道パフォーマンス甲子園*



© 全国高校書道パフォーマンス選手権大会実行委員会

は2008年に始まりました。2009年8月に行われた第2回大会には5校が参加しました。部員10名程度から成る各チームは、自分たちが選んだ歌を流しながら、4メートル×6メートルという大きな紙にその歌詞を書き競い合います。衣装も各チームで工夫を凝らし、袴に襷掛け、キャミソール、ポロシャツなどを身につけます。

2009年からは、日本テレビ「ズームイン!! SUPER」という番組のなかで、全国大会「書道ガールズ甲子園」が行われています。2010年お正月に開催された第4回大会で優勝した埼玉県立川口高校は自分たちが考えたメッセージを部員全員で力をあわせて表現しました（「書道の魅力を伝えたい」参照）。

* 甲子園 毎年「全国高等学校野球選手権大会」が行われる球場「甲子園」の名は、高校生の全国大会の代名詞ともなっています。特に、文化系の分野で行われる高校生を対象とした全国大会にもつけられることが多い。写真甲子園、まんが甲子園、俳句甲子園など（甲子園について詳しくは、くりっくにっぽん「甲子園：高校生が輝くステージ」参照。 http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/jcn/t23jcn_j.html

書道パフォーマンス甲子園誕生の背景

四国中央市は日本一の加工紙の出荷額を誇る町ですが、長引く不況の影響をうけていました。そこで、地元の愛媛県立三島高校書道部の女子高校生たちが、書を通じて地元の紙産業を盛り上げ、地域の活性化を図ろうと、「書道パフォーマンス甲子園」を企画し、実施までこぎつけました。この様子を描いたドキュメンタリー番組を日本テレビが放映したところ、視聴者の大きな反響を呼びました。そして、もう一つのパフォーマンス書道の大会「書道ガールズ甲子園」が始まりました。また、三島高校書道部が奮闘する実話をもとに、映画『書道ガールズ!! わたしたちの甲子園』が生まれ、2010年5月に公開されました。



パフォーマンス甲子園のポスター
© 全国高校書道パフォーマンス選手権大会実行委員会

パフォーマンス甲子園のホームページでは書道パフォーマンスの動画を見ることができます。

<http://shodo-performance.jp/index.html>

さまざまな表現

言霊を筆や墨で表現

書道家武田双雲氏は、自らを「言霊を筆や墨で表現する」アーティストであると語っています。大字を書くパフォーマンスを行ったり、音楽をはじめさまざまな分野のアーティストとコラボレーションしたりするなど、従来の書道家の枠を超えた活動が注目を集めています。



舞台上でパフォーマンスをする武田双雲氏

© Souin Office

武田双雲は、自著『書の道を行こう』（PHP研究所）で、書道についてこう語っています。「書を書くことで、自分と向き合う時間が生まれ、ひとつの表現にまとめることで、心の奥にある感情や思考を確認することができるのです」

英漢字

書道家國重友美氏は、漢字と英語を融合させた書道を行っています。大学生のときにノートに書いた筆記体の「truth」が「真実」という漢字に見えたことから、考え生出したといえます。「LOVE」の4文字を組み合わせて「愛」を、「ROAD」で



「L」「o」「v」「e」を組み合わせて書かれた「愛」
「愛LOVE」（『國重友美英漢字』作品集 御祝）株式会社TOKIMEKIパブリッシング発行

© Kunishige Tomomi

「道」を、「SEA」で「海」を書いた作品などがあります。

口で書く

牧野文幸氏は口に筆を加えてそのときどきの自分の思いを書きます。高校2年生のときにプール事故で頸椎を損傷した牧野さんは首から下の自由が利きません。懸命のリハビリを行いながら、理学療法士に勧められ、口に筆をくわえて絵を描くようになりました。その後、小学生の頃からずっとやっていた得意だった書道をもう一度やりたいと思い、書道を再開し、2年後には師範の資格をとりました。口で書くようになって、書は手で書くのではなく、体の中心軸で書くものだと気づいたと言います。だから、口で書くことは周りの人が考えるよりも大変ではないと言います。牧野さんにとって、書道と絵は、社会とつながり、社会に参加する術であり、「生きることそのもの」です。

牧野さんは書道の魅力は、漢字という文字がもつ意味を考え、書体や字体を自分なりに表現することで、同じ文字でもいろいろな雰囲気を出することができること、つまり「千変万化・自由自在・何でもアリ」なところだと語ります。



目の前の色紙に、空間と字のバランスをとりながら書く牧野文幸氏

© TUF

さまざまな大会

毎年開催されている国際高校生選抜書展は国内外の高校生を対象としている大会です。2009年に開催された第18回国際高校生選抜書展には、日本と海外24の国と地域から、1万5千点を超える出品がありました。ほとんどは高校書道部などの団体での出品ですが、個人でも出品できます。個人賞の

ほか、団体賞が設定されています。このほか、全日本高校・大学書道展や、全国高等学校総合文化祭など、数多くの大会が開かれています。

書の甲子園ホームページ：

<http://mainichi.jp/kansai/etc/shodo/>

年末、今年の漢字：世相を反映する一文字

毎年12月、財団法人日本漢字能力検定協会が、その年をイメージする漢字一字を日本全国から公募し、もっとも応募数の多かった漢字一字を「今年の漢字」として発表しています。選ばれた漢字は、京都清水寺で貫主により巨大な和紙に揮毫され、清水寺に奉納されます。「今年の漢字」は、その年の世相を反映するものとしてメディアなどで取り上げられます。



2009年の今年の漢字®
清水寺の貫主が「新」を揮毫

©主催・写真提供：
(財)日本漢字能力検定協会

歴代の「今年の漢字」

- 1995年 「震」 阪神・淡路大震災が発生した年。地下鉄サリン事件や金融機関の倒産などにより社会不安が増大した。
- 1999年 「末」 1900年代最後の年。翌年への「末広がり」の期待を込めた。
- 2000年 「金」 シドニーオリンピックで女子柔道、女子フルマラソンで金メダル。
- 2007年 「偽」 食品偽造事件が相次いだ年。防衛省の汚職問題が発覚。
- 2008年 「変」 日本の首相交代やオバマ米大統領の「チェンジ」、政治経済をはじめ、変化の多かった一年。
- 2009年 「新」 日本の政権交代、オバマ米大統領の就任など政治の一新。新型インフルエンザの流行。

身近な毛筆

日本では、子どもから大人まで、毛筆と墨で字を書く習字や書道は人気の高い習いごとです。習字や書道の教室に通い始める理由として多いのは、「字が上手になりたい」というものです。さらに、美しく書くだけでなく、自分らしさを表現したいと思って書道を始めの人や、書での表現に楽しみを見出している人も多くいます。

授業で習う

小中学校では、授業で「書写」の授業があります。小学1、2年生は、鉛筆で正しく美しい字を書く練習をする授業が、3年生以上は、毛筆と墨で字の練習をする授業が、週に1時間程度あります。中学校でも1ヵ月に1時間程度、毛筆と墨を使って字を書きます。小中学校では、文字の成り立ちや書き方を覚え、文字を正しく整えて書くこと、礼儀作法や集中力を身につけることがねらいです。

一方、高校では多くの場合、書道は芸術の選択科目のひとつとして設けられています。生徒は、美術、音楽、書道などのなかから選ぶことになっています。感性や個性豊かな表現力、鑑賞力などを伸ばすことが目標とされています。

習いごと

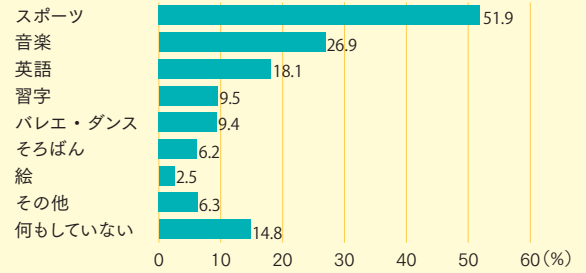
習字は小学生の間で人気の高い習いごとで、水泳などのスポーツ、音楽、英語について4位です。中学生、高校生と年齢が高くなるにしたがってその数は減っていきませんが、社会人になってカルチャーセンターや通信教育で書道を始めたり再開したりするという人も少なくありません。書道人口390万人のうち70%が50代以上が占めています（レジャー白書'08）。

東京のほか、ソウル、北京、ヘルシンキ、ロンドン、ワシントンDCは下で見られます。

6都市にみる習いごとの状況

http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon_6toshi/hon/hon_1_2_9.html

習い事の状況：東京



出典：Benesse教育研究開発センター 学習基本調査・国際6都市調査報告書 2006年

書き初め

年始に行われる書き初めも日本人にはなじみの深いものです。多くの小中学校では書き初めが冬休みの宿題として出されます。例えば、東京都内のある小学校では、3年生は「お正月」、4年生は「希望の光」など、学年によって指定された字句を指定された大きさの紙に書いて提出します。冬休み明けに、書き初め会（児童生徒が体育館などに集まり、床に紙を広げて、課題の文字を書くもの）や、冬休みに書いた書き初めの展示会を行う学校も少なくありません。また学校だけでなく、あちこちの商店街や公的施設で書き初め展が行われます。

東京にある大屋内競技施設の武道館では、毎年お正月に書き初め大会が行われます。2010年の大会には、予選を通過した3歳から80代まで約2,800人が集い、書き初めを行いました。参加作品のなかから、内閣総理大臣賞など優秀作品330点が選ばれました。



武道館で毎年行われる書き初め大会

© 財団法人日本書道連盟

漫画『とめはねっ! 鈴里高校書道部』

高校の書道部を舞台にした漫画で、帰国子女の男子生徒と運動神経抜群の女子生徒が入部し、書道にのめりこんでいく姿が描かれています。書道部の部員が書道パフォーマンスを行う場面も登場します。単行本累計150万部を超えるヒット作となっています。2010年にはドラマ化されテレビ放映されました。

タイトルの「とめはね」は、書道の表現方法の基本である「とめ」「はね」「はらい」からきています。



© 河合克敏 / 小学館

書いてみよう!

書いてみよう



書道の用具

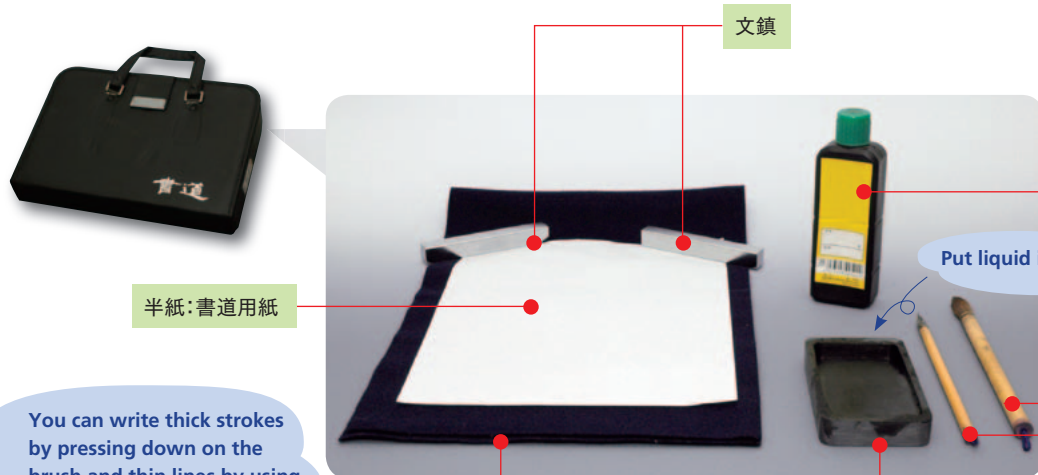
硯、筆、紙、墨が最低限必要な用具です。

carrying case for shodo equipment

墨汁：墨を磨るには時間がかかるので、墨汁も市販されている。



墨：固形のインク。油煙、松煙などの煤を膠で練り固めたもの。



文鎮

半紙：書道用紙

Put liquid ink here.

硯：硯に水を少し入れ、墨を磨って墨汁を作り、作った墨汁をためておく。石材が多い。

筆：馬、羊、イタチ、タヌキなどの動物の毛をまとめて木や竹の柄の先に取り付けたものが一般的。

You can write thick strokes by pressing down on the brush and thin lines by using just the slender tip.



See movie showing how to hold a brush and make ink at "Shodo chotto mi koza" (A Glimpse of Shodo). <http://www.nyumon.net/ultimate/119/index.html>

© TJF

書道の書体

篆書、隸書、楷書、行書、草書が五書体といわれます。そして、その後、漢字仮名混じり文が成立し、これが現在の表記の原型となりました。漢字仮名混じり文や仮名文は日本の書道の大きな特徴といえます。



楷書：字形が方正で安定した書体。
行書：楷書と草書の中間。
草書：行書をさらに崩し、点画を略したもの。
仮名：行書から生まれたもの。



© 松平紗永子

書道の歴史

書道は中国が起源で、8世紀に日本に入ってきたといわれています。その後、日本独自の発展を遂げ、今ではさまざまな流派が存在します。

中国には王羲之を筆頭に各時代での大家がいますが、日本でもこれら大家の作品はよく臨書されます。

筆ペン

書道は身近であるとはいえ、ふだんの生活で筆を使うことはほとんどありません。しかし、筆で書くことが望ましいとされる伝統的な場もあります。たとえば、結婚式や葬式など改まった場の受付で名前を書いたり、その際に渡す祝儀袋や香典の名前を書いたりする場面です。こんなときに便利なのが筆ペンです。筆ペンとは、毛筆のように書けるペンです。

新年に送る年賀状の宛名も、筆や筆ペンで書くという人もいますが、最近では毛筆風の印刷によって代わられつつあります。

しかし、入学式や卒業式などの式辞や謝辞、賞状の氏名などは筆ペンではなく、毛筆と墨で書かれるのが正式です。



© TJF

書道の魅力を伝えたい



書道が大好きで、小学校3年生から書道教室に通っています。書道の楽しさや魅力をたくさんの人に伝えていきたいです。

あいか……埼玉県立川口高校3年*

中学生のとき書道教室で「書の甲子園」の作品集を見ました。そこには川口高校書道部の先輩の作品が載っていました。それまで、書道はお手本通りに書くものだと思っていたのですが、その作品は違っていました。圧倒されるほど力強く、迫力がある書体で、今までの書道のイメージが変わりました。それがきっかけでこの先輩のいる書道部に入りたいと思い、川口高校に入学しました。

伝えることの大切さ

書道部に入ってから、私はすごく変わったと思います。中学の頃は、人と違う意見を言うと嫌われてしまう雰囲気があったので、いつも自分の意見を抑えていました。そして高校で書道部に入った頃も、あまり自分の意見を言わないようにしていました。でも先生から「自分の意見を抑えていても人に伝わらないよ」と言われ、勇気を出して自分の思いや考えを主張してみました。そのとき、みんなはきちんと受け止めてくれたんです。それから、私は自分の意見をきちんと伝えられるようになりました。

私たちの書道部では、みんなが協力して一つの作品を作り上げるパフォーマンス書道も行っています。多数で行うため、それぞれの意見が食い違ってしまったりもします。そういうときこそ、自分の意見を言うことがとても大切だと思います。例えば、「書道ガールズ甲子園」のための練習をしていたとき、パフォ

ーマンスを重点的に練習するのか、それとも書道に比重を置くのか、部員二人の意見が割れたことがありました。両者は黙り込み気まずい雰囲気でした。私は二人に「怒っている理由を言わないと伝わらないし、相手の意見も聞かないとわからないよ」と伝えました。そのことで、お互いが気持ちを伝え合うことができ、解決できました。このような経験から、自分の意見はきちんと相手に伝えることで、人は理解し合えるということを知りました。



パフォーマンス書道の筆。墨を吸うと1本約10キロ。これを2本束ねて使うことも。墨は一つの作品を書くのに3リットルは使います。

苦しみを乗り越えて

私は、日々の練習で気がついたことや先生のことば、ひとつひとつをすべて大事にしています。そして、それらを次の練習に生かすために毎日ノートに記録しています。もう7冊になりました。



そのなかでも3年生の夏休みに書いた「自分を素直にさらけだす。ありのままを感じる！」ということばには忘れられない思い出があります。

そのころ私は、パフォーマンス書道、展覧会や大会に出品する作品が、思うように書けず、教わったことをうまく表現できな

川口高校書道部

練習は月曜日～金曜日の午前5時～8時半、午後4時～8時頃。大きな大会の前は土日にも練習します。主にパフォーマンス書道の動きを練習したり、大会に提出する作品を作ったりします。その後は全員で反省会をして練習を振り返ります。先生からじっくり筆使いを習うこともあります。先生は毎朝スープを作ってくれるので、それも楽しみのひとつです。

活動：

- * 全国規模の展覧会へ年間30大会出品
- * 毎年末に校外展「川高書展」を開催
- * パフォーマンス書道（日本テレビ「ズームイン!! SUPER」主催「書道ガールズ甲子園」三回連続優勝）

なくなっていました。力を入れようとすればするほど空回りして、うまくいっている部員をうらやましく思ったり、わからないことをわからないと素直に言えなかったりして、苦しんでいました。心が荒れて、暗くなり、いらいらして人に八つ当たりをしていました。

そんなとき、先生から「うまくできないという事実にとらわれず、なぜできないかを分析するといよいよ」と言われました。そこで、私は、「思うように書けなくて苦しい」と思うのではなく「どうしたら思った通りに書けるようになるか」「うまく書けない理由はなんだろう」と考えるようにしてみました。すると、筆を持つ力や動かし方を工夫すればいいんだと気がつくことができました。それからは思ったような文字が書けるようになりました。今思うと、自分で自分を苦しめていたんですね。このような経験から、何か苦しいことに直面しても、できないことを素直に認めて、考え方を変えてみることで解決できるということに気がつきました。苦しかったですが、大きな気づきを得ることができました。失敗は成功のもとですね。

夢に向かって

母は、「あいかは、もし書道部に入っていなかったら、ひきこもりになっていたかもしれないね」と言います。私もそう思います。人と交流することが苦手だったので、書道部での仲間や先生との出会い、パフォーマンス書道がなければ、学校に行っていなかったかもしれません。私にとって、書道とは生活の一部、というよりも人生そのものです。将来もずっと書道に関わっていきたいと思っています。

私の夢は、筆を作る職人になることです。職人になるためには、勉強するお金が必要なので、まずは高校卒業後に書道用品の会社へ就職することにしました。そこで社会人として経験を積み、夢を叶えるためにお金を貯めたいです。今まで、さまざまな種類の筆を使ってきて、筆の材料によって書いたときの感触が違うことに興味をもちました。いろいろと筆について調べているうちに、おもしろくなってきて、いつか自分で作ってみたいと思うようになりました。

この3年間、ただ書道の技術を磨いてきただけではありません。礼儀作法や精神的な強さも身につけました。これらのこと

書道部顧問の三宅先生からあいかさんへのメッセージ

あいかはこの3年間、書道パフォーマンスを通じて、人と支え合うことを学んだと思います。ほかの人から支えられていること、そして自分もほかの人を支えていることを実感したのではないのでしょうか。そのようななかで、あいかは、人を思いやり、気遣える人に成長しました。同時に、自分と向き合い、少々のことではめげない強さも身につけました。

あいかには、他人の気持ちがわかる大人になってほしいです。そして、自分の気持ちを素直に表現して、いつまでも書と人を愛する人であってほしいです。

は、卒業して社会に出ても役に立つと思っています。これからも、失敗をバネにして次へと生かして進んでいきたいです。

書道の魅力

筆で書いた文字は、墨の量、力を入れ方などで、同じ文字でもまったく違って見えます。それから、書いた人の癖、性格などが表れるので、書いた人の人となりが見た人にも伝わります。これが書道の魅力ですね。

そして特にパフォーマンス書道は、書いている人だけではなく、見ている人も楽しめるのが魅力です。私がパフォーマンス書道を始めたのは、書道部に入ってからです。初めは、あんなに大きな紙に書くことにとても驚きました。大きい筆を持ったときは緊張しました。でも今では、音楽に合わせて動きながら書くことが楽しくて仕方ありません。そして、私たちが楽しんでやっていると、私たちのパフォーマンスを見ている人も楽しそうにしてくれていて、気持ちが伝わっているんだと実感します。書く人と見る人の気持ちがつながることは、とても嬉しいですね。

*この記事は2010年2月に行ったインタビューをもとにまとめました。学年はインタビュー当時のものです。



川口高校書道部の作品「道」

わたしの好きなもの

好きな文字

「進」。私たち書道部の仲間はこれから、それぞれ違う道へ進むけれど、ここで学んだことを大事にすれば、まっすぐに「進」んでいける、と思うからです。

好きなことば

「あきらめない」今の自分があるのは、つらいことがあっても書道をあきらめずにきたからです。

好きな場所

書道部の部室と、自分の部屋。心が落ち着くから。

趣味

書道と、書道に関する本を読むこと。榊莫山が墨について書いた本が特に好きです。

